

4) 新潟県内大腸癌調査報告

島田 寛治 (県立柿崎病院外科)

1989年に続き1990年の新潟県内の大腸癌手術例、内視鏡的ポリペクトミー例を、外科及び内科の110施設に依頼し、1505例を集計、登録した(施設回答率90.9%、推定症例収集率98%)。大腸癌手術は55施設、内視鏡的摘除は26施設でなされていた。

年齢は25才から94才におよび、平均64.9才、男:819例-64.3才、女:686例-65.5才。

手術症例 1338例(男:714, 女:624)

結腸癌 724例(男:378, 女:346)

直腸癌 582例(男:317, 女:265)

多発癌 32例(男:19, 女:13)

内視鏡的摘除 167例(男:105, 女:62)

部位別頻度は前年と同様、左半結腸より右半結腸が多く、その右半結腸では女性が明らかに多く、左半結腸と直腸は男性が多かった。この傾向は過去3年間とも認められたものであるが、全国の大腸癌登録ではみられない傾向であり、有意差を認めた($p<0.01$)。

罹患率(対10万人)は全体で60.2と高かった。

主題「Mucosal Prolapse Syndrome」

1) Mucosal Prolapse Syndrome の3例

井上雄一朗・八木 伸夫 (上越総合病院外科)

本間 憲治

Mucosal Prolapse Syndrome と考えられる3例を報告する。症例は21才男性、42才男性、81才女性で、いずれの症例も肛門縁より5cmの直腸下部に病変を認めた。2例は潰瘍、1例はポリープ様病変であった。組織学的にはいずれの症例も直腸粘膜固有層に線維筋症を認めた。Straining habit は2例に明らかであったが、他の1例については明らかでなかった。潰瘍を形成していた2例とも、保存的治療及び、Straining を避けるように指導を行い、現在まで症状はなく、ポリープ様病変の1例は同時に認められた内痔核の手術後現在まで出血等の症状は認められていない。

2) 肛門手術後病理学的に診断された直腸粘膜脱症候群の症例

三輪 浩次・浅井 正典 (新潟臨港総合病院 外科)

岡本 春彦 (新潟大学第一外科)

直腸粘膜の脱出が原因となって、多発の潰瘍、腫瘍を伴わないが発赤のある平坦或はポリポイド様の隆起型などの病変を示す疾患がある。何れも直腸粘膜固有層に線維筋症の像がみとめられる特徴があり直腸粘膜脱症候群(Mucosal prolapse syndrome; M.P.S)といわれ最近注目されている。私達は平成2年4月に直腸絨毛腺腫と診断し局所切除を行い病理学的に隆起型のM.P.Sと診断された症例を経験した。その後この疾患を念頭におき痔核の手術の際にM.P.Sの疑いのある症例の病理学的検索を行い2年間で21症例を経験した。♂:17例, ♀:4例でありflat type 11例, polypoid type 10例であった。部位は前方6, 右側9, 後方8例である。排便、病悩期間、術前診断なども加え、発生機序や治療についても言及し、典型的な4例を提示した。尚不完全(不顕性)直腸脱がありM.P.Sと診断された後1年3ヶ月で完全に直腸脱となった症例も併せて提示した。

3) 当院における Mucosal prolapse syndrome 症例の検討

川原 薫・吉田 鉄郎 (医療法人誠心会 吉田病院外科)

武藤 一朗

永田 邦夫・山口 正康 (同 内科)

宮島 透・本間 照 (新潟大学第一病理)

渡辺 英伸

当院において、1990年および1991年の2年間に、病理学的にMucosal prolapse syndromeと診断された26例について報告した。

年齢は、10才から80才にわたり、加齢とともに増加する傾向をみとめ、性比は23:3と男性に多かった。病変の部位は65%が前方にあったが、35%が側方及び後方に存在した。病変の型は、polypoid型15例, flat型5例, ulcerating型及びpolypoid & flat型1例であり、合併病変は、3度以上の内痔核46%, 直腸脱19%, 術後障害16%であった。排便時間が5分以内の症例が12例あり、過度のいきみと関係のない本症の存在が示唆された。